

## 『愚管抄』の人物像

——『平家物語』との比較から——

### 目次

はじめに

比較にあたつて

それぞれの人物たち

明 雲

基 房

邦綱と義仲

描き出された人物の差異のもつ意味

むすび

### はじめに

慈円が生まれたのは久寿二年（一一五五）四月十五日。幾度かの戦乱を経て、武家政権による国家体制の確立されてゆく変革の時代であった。その変革期に著述された『愚管抄』という書の「道理」による歴史解釈、そしてその著述動機・目的がその解釈を大きく支配して

### 小 栗 ゆかり

いる事に、大きな魅力を感じたことがこの論文作成の第一歩であった。そしてその広範な内容から、慈円の実際経験した治承・寿永の戦乱期に相当する巻五を選ぶ。実はこれは同時代を物語として描いた『平家物語』と比較し、その生じた差異が慈円の歴史解釈による、あるいはその著述動機に根ざすものであることを見極めたいという意図からのものなのである。もちろん承久までの時代も重要であるが、比較という手段で考察してゆくために、あえて『平家物語』とその時代を選ぶことにした。

### 一 比較にあたつて

比較に移るが、とくに登場人物の比較を試みたい。『平家物語』は諸本の中から次の七本を選んだ。

覚一本（以下『大系本<sup>2</sup>』と称す）

屋代本<sup>3</sup>

南都本<sup>4</sup>

四部合戦状本<sup>5</sup>（以下『四部本』と称す）

延慶本<sup>6</sup>

長門本<sup>7</sup>

源平盛衰記<sup>8</sup>（以下『盛衰記』と称す）

『平家物語』と『愚管抄』とは、著作目的・成立過程が異なるために、当然同一人物であっても登場回数やスポットの当て方はまるで逆という場合が少なくない。そこでできる限り慈円と関係の深い、そして登場回数が多い人物の抽出に心掛け、次の四人を選んで分析をおこなった。

天台座主明雲

藤原摂関家松殿（基房）

五条大納言邦綱

源義仲

但し本稿では紙幅に限りがあるため、具体的な比較は明雲・基房にしぼる。

## 二 それぞれの人物たち

### (1) 明雲

#### ① 『平家物語』の場合

ここでは巻二「座主流」「一行阿闍梨之沙汰」、巻八「法住寺合戦」に登場する明雲をとりあげる。但し諸本の成立や性格から人物の描き方を分析する事はしない。たんにおのおののように明雲が登場するかを見るにとどめる。また『四部本』は巻二・四・八は欠本のため見ることはできない。また『平家物語』自体、説話性を持っているため『玉葉』など用い、できる限り事実に沿うようにする。

さて『大系本』によると治承元年（一一七七）五月五日、座主明雲の公請を停止される。これを聞いた山門の大衆らが参洛するらしいと京中は騒ぐが、これに対し後白河法皇が兵を召集したと『延慶本』『盛衰記』『南都本』にある。この事は日記類には記されていない事件である。法皇が戦闘的な行動を起こし、またこの三本によれば、大衆の勢いが激しく、人々の動揺や不穏な空気をうかがわせる。これにより十八日に太政大臣以下公卿らが僉議を開く。『延慶本』は二十日とある。『玉葉』によれば、十八日と二十日の二回開かれており、間違いない。公卿らはその席で、神神の怒りや三千人の衆徒を怖れて何も発言しない。実際には何も言わなかった訳ではないのに、そのように描いたのは、衆徒を怖れる公卿

らの無力さを誇張しようとしたか、あるいは山門の衆徒を正当化しようとしたからかと考えらる。れまた山門の衆徒らが会合し僉議した時の發言やその折の落書には、明雲への尊敬と言葉巧みな称賛が並べられ、とくに『延慶本』『長門本』での彼らはかなり饒舌である。作者自身、この流罪に反感をもったような描写である。もちろん無実の罪であり、諸本それぞれ西光父子の讒言である事を明記し、流罪の不当さを主張している。とくに不当さを強調するために、ここぞとばかりに筆をふるっているようである。

さて明雲は還俗させられ松枝と俗名をつけられるが、ここで『南都本』『延慶本』『長門本』『盛衰記』には、『松枝は皆さかもぎに切はてゝ山にはさすにする者もなし』の歌が増補されている。これについては、当時和歌は時代の影響を受けて変化し、また当時落書がしきりにおこなわれた。それらは多くは不平・皮肉・嘲笑・滑稽の要素を含み、そこに作者不明の当時の民衆の声が聞かれる<sup>10</sup>といわれるように、この歌は民衆、もしくは山門の僧の歌であらうかと判断できる。兼実も『玉葉』で都を出よとの院宣が厳しい事を記し、

政道之体後鑑有<sub>レ</sub>恥不<sub>レ</sub>憐之世也<sup>11</sup>

凡此間沙汰夢歟非<sub>レ</sub>夢歟 惣非<sub>レ</sub>言語筆端之所<sub>レ</sub>及<sup>12</sup>

と、この事態を嘆いている。

次に『大系本』では明雲の素姓を述べるが、『延慶本』『長門本』にはそれは見られず、座主拜堂の折に中堂の宝蔵の箱の中の名を見る慣例についても、これを欠いている。説話的要素を含む増補系ならば、素姓説明は欠かせない記事ではないかと思われるが、疑問である。宝蔵の箱の中の未来の座主名に明雲の名があるという話は、明雲の座主就任の必然性を説くにはよい材料と思えるのであるが、両本には見られない。

その後配所に赴く明雲を『盛衰記』は哀感をこめて描く。自然の草木や鳥に託して明雲に己れの運命を嘆かせている。

山を下りた大衆は護送の役人から明雲を奪還しようとい分寺へ向かう。これに対し明雲は驚いて、彼らを説得する。その言葉の中に、

・遠流の重科をかうぶれば世をも人をも神をも恨み奉る事なし(『大系本』)

・遠流ノ重科ヲ蒙ル是前世ノ宿業ニテコソハ有ラメト思ヘハ世ヲモ人ヲモ神ヲモ仏ヲモ更ニ恨ミ奉ル事ナシ(『延慶本』なお『南都本』『長門本』『盛衰記』共に大差なし)

とあり、彼らを帰山させようとする。『大系本』以外の諸本の――部にように、重科を蒙ったのは前世の宿業で

此明雲と申は村上天皇<sub>ヲ</sub>七の皇子（中略）かゝるた（ツ）とき人なれども前世の宿業をばまぬがれ給はず。あはれなりし事共也

とある。この点を見ると、『大系本』より増補系諸本において明雲は、己れの運命を正面からとらえ、諦めて事荒らだてまいという姿勢を示す。しかしそれゆえか、やや気弱な面も感じられる。例えば、大衆が明雲を奪取しようとしたと聞いて「おどろい」とする『大系本』に対し、『長門本』は「おそれ給」うたとする。阿闍梨祐慶の一喝で大衆の興に身を任せようとする折、「おそろしさにいそぎ乗り給」うた『大系本』に対し、『延慶本』『長門本』『盛衰記』は「わななく／＼乗り給ふ」たとする。明雲は大衆の思うままであり、かえって大衆の力を誇張しているようでもある。また『南都本』は「心ナラス乗給」うたとあるが、明雲がおのれの運命を前世の報いと見つめる態度は、この方がはっきりしているかと思う。かえって『大系本』の方がおろおろした様子を窺わせる。『玉葉』によればこの時の明雲は

人伝云、前座主去夜絶入其謹密之間、不能飲食云々<sup>13</sup>

と、確かに自ら謹慎の気持ちでいたようである。

その増補は、明雲の首が討たれ六条河原にさらされて  
いるのを見た行清法橋が、非常に悲しみ、夜密かに首を  
盗み手厚く弔う、というものである。とくに『盛衰記』  
には行清の悲しみに対し「さこそ悲しかりけめと推量ら  
れて哀也」と筆者の感想を添える。またかつて信西が明  
雲に兵死の相を見たとし、その運命を悲しむ。これらの  
増補は、哀れさを強調するためのものかと思われる。

またこの時、後白河院は諸本すべて「むざんや」「非業の死にすべきものとはおぼしめざざりつる物」とその死を嘆く。しかし『玉葉』によれば「定能卿自院退出、余謁之、語云、法皇殊無御歎息之氣<sup>14</sup>」と、院の悲しみなど一向にない、とあり、事実はまったく反対であった。

以上のように『平家物語』は、明雲の讒言による流罪からその悲惨な死までの運命を描く。つねに不当な流罪と大衆の動きの正当さとを訴えており、まさに「座主、山門に対し十分の敬意をもって描き叡山の歴史と權威については堂々たる行文がのべられ宗教の時代といえる中世の語りものとしての重さを与え<sup>15</sup>」て、明雲は登場し

たのである。

② 『愚管抄』の場合

①のような称賛の中の明雲を、慈円はどうとりあげたか。一言で言えば非難の目しかない。

明雲が流罪になった件に関してはきわめて記述が少ない。単に明雲が衆徒を使って威嚇・要求を掲げさせたとのみある。したがって衆徒が明雲を慕いそのあとを追ってきたり、明雲が自分の運命を前世の報いなどと神妙に言うような記述を見つけることはできない。また寿永二年七月二十五日に、都落ちする平家に同行しなかった明雲の不実さが非難される。

「法住寺合戦」にみた限り、非業の死を遂げた明雲を惜しみ美化する『平家物語』に対し、こちらは勇敢というより牙をむいた天台座主が描かれていた。「山ノ座主明雲参リテ悪僧具シテ、ヒシトカタメテ候ケル」。これは、義仲から法皇を守ろうと三井寺・延暦寺に召集がとび、明雲も荒法師たちと守りを固めたところである。「当時仏法王法の危機ともみえた時代で叡山も横暴はなはだしく荒廃した時代<sup>17</sup>」で、兼実が「偏天魔之所為歟、一宗滅亡時已至<sup>17</sup>」と嘆息したように、今ここで慈円もそれを史実として明記した。これは叡山擁護の『平家物語』

語』には到底書けない叡山の実態であろう。

慈円は次に明雲を「スベテ積悪ヲ、カル人也」と評す。明雲が座主快修と座主職を武力で争い、死者を出させてまで座主に就任した事をあげている。この事件は『華頂要略』の仁安二年（一一六六）正月一日にみられる。

西塔ノ僧徒天台座主快修ヲ罷メシメント欲ス、依リテ東塔ノ衆徒仏院政所小谷岡本ヲ城郭トシ是日西塔ノ僧徒ト千光院ニ戦フ。十六日、延暦寺西塔ノ衆徒赤袴党ト称シテ東塔ノ政所ヲ襲ヒ互ニ殺傷ス（但しこの引用は原本を見る事ができなかったため、『史料綜覧<sup>18</sup>』より引用）

つまり、以上のように明雲は僧侶としてでなく、政治的な人間として俗世に生きた。慈円はそれに厳しい批判を与えた。また明雲の最期は『愚管抄』の方が詳細で生々しい。同じ座主の立場にあっただけに、慈円としては注目せずにはいられない重大事件であったにちがいない。

以上、明雲の記述をめぐって、『愚管抄』は『平家物語』とはかなりの相違がある。これは何が原因であろうか。

③ 慈円の描き得た明雲像の背景

慈円が叡山に入った当時、叡山内では青蓮院門跡と梶

井門跡とが対立していた。両門跡の一の係争点は座主争いである。青蓮院の慈円のとを受けたのは、堀井の明雲の弟子の承仁親王であるが、この人は就任の翌年病没する。これを慈円は当然と受けとめており、両門跡間の軋轢や感情的対立の激しさが想像できる<sup>19</sup>。

天台座主は顕密にすぐれ、衆徒らを指導・統制できる力量が必要とされる。『平家物語』は明雲をそれに適う人物であると尊敬する。だが現実には、座主職は延暦寺と政界の密着によって揺れ動く。それを包み隠すことなく明記したのが『愚管抄』であつたろう。対立している明雲を、慈円が悪しざまに書くことは考えられる。明雲が清盛と結んで権力を握ったのは確からしい。しかしそれは彼に限ったことではあるまい。座主流罪の事件展開は、実は清盛失脚を計った後白河法皇の政略であるといわれる。しかしこれら政界の裏を『平家物語』は全く表に出さない<sup>20</sup>。かならずしも史実どおりでなく、『平家物語』の唱導文学・抒情詩的文学といわれる側面の中での明雲像が生まれたのである。それが「かゝるた（こ）とき人なれども前世の宿業をばまぬがれ給はずあはれなりし事」と評された明雲であつた。

また付言すると、九条家出身の慈円が源氏側にあつたことから推測しても、平家や明雲はいずれ滅びてゆくも

のとされなければならなかつたろう。この事はまた後述することにする。

## (2) 基房

### ① 『平家物語』の場合

巻一「殿下乗合」事件は『大系本』以下諸本大差ないが、明らかに異なるのは『盛衰記』である。鷹狩りの帰り、資盛は基房と行き合い恥辱を受ける。清盛はこれを怒り、重盛の制止をふりきり、基房に報復する。しかし実は『盛衰記』のように笛の習いの帰りであり、後に基房が重盛のもとへ詫びをいれたにかかわらず、その重盛の命により基房は報復を受けたのである。『盛衰記』以外の諸本が虚構である事は周知の事実で、『玉葉<sup>21</sup>』の記事からも明白である。通説のように、重盛の報復を清盛の所為とするのは、清盛を積悪の人とするための虚構である<sup>22</sup>。それゆえ、資盛に恥辱を与えた基房が重盛に謝罪したにもかかわらず、その重盛の手で報復された事実は、一切記されなかつたのであろう。この場での基房はそのため人物自体の印象は薄い。

さて基房が報復を受けた事に対し、諸本はどのように述べているだろう。

・ 摂政関白のかゝる御目にあはせ給ふ事いまだ承及ばず（『大

系本』

・昔モ今モタメシスクナクソ有ケメ『延慶本』『長門本』

・撰錄の臣と申すは忝も春日大明神替入らせ給て君も共に國をおさめ民を孚御座尤仰き奉へき所事也『盛衰記』

・〔相當する詞ナシ〕（『四部本』）

撰錄に対する『大系本』の――部と異なるもののみあげてみた。やや表現に差がある。また『盛衰記』にはこの場合に相當する詞はないが、重盛の清盛に忠告するセリフに右のようにでていた。諸本それぞれに撰錄に対する尊敬でもってこの事態を悲しむ。とくに『盛衰記』には、

此事たちまち天意に逆つて深く冥慮に背きければにや去ぬる比大織冠の御影破れ裂けたりけり、かゝるべきしるしとおそろし

とあり、誇張した感がある。ただ基房は個性的な人物としてよりも、この場合撰錄の一人としてだけの登場だったのではなからうか。というのは、惨事にあつた後の基房の様子を諸本はあさましいと嘆き、それを強調しているからである。

・還御成心ノ内浅猿ナントモ愚カ也（『屋代本』）

・しほしほとして渡る（『長門本』）

・〔相當する詞ナシ〕（『四部本』）

・タダ門ヲトザシテ打ヒソメタル計ナリ（『南都本』）

これには後日譚がある。『延慶本』『長門本』『盛衰記』によると、清盛の邸前において、庶民が前夜の基房報復事件をなぞらえた扮装で現われ、道化のように、衣服の裾を腰にひきからげて退散していった基房の真似をして笑いあつた、とある。『盛衰記』はやや異り、これに重盛の発言が加わる。それはこの庶民の所業を、おそれおおくも撰錄に対し刃を向けた平家を嘲笑っているのだと見て、撰錄よりも驕った平家の乱暴に視点を置いてゐる。いずれにせよ、この場では人人も作者も共に笑い合う。庶民から見えた場合、清盛と基房の事件は自分らに無関係といつてよい政界内での争いであり、面白いとしか感じられないのであろう。だから基房の醜態は笑い話となり、同情はされない。

ところで先述したように、『盛衰記』のみがこの事件を事実在即して記している。それについて富倉徳次郎氏も『玉葉』の記事を取り入れ書き改めたものであると言われる<sup>23</sup>。私もそれにしたがりたい。

卷三「法印問答」においても、同じように基房の没落を扱っている。治承三年十一月十四日、福原より清盛が入洛する。基房はそれを聞き、主上（高倉天皇）に清盛は自分を滅しに來たと訴える。

・急ぎ参内あつて奏させ給（『大系本』）

・心細ケニ奏サセ給ヘリ（『延慶本』）「長門本」

・参内御前泣々申（『四部本』）

とさまざまだが、どれもおびえる基房の表情を思わせる。そして同十六日、基房は鎮西へ流される。『玉葉』は十七日である。しかし作者は慣用的な憐みの言葉を記すだけで、同情的な態度はみられない。

卷八「法住寺合戦」で、『大系本』では基房は義仲に無理に娘の婿になられてしまう。これは『延慶本』「長門本」「南都本」には見られない。当時の史料によれば、実際は基房と義仲は手を結んでいたことがわかる。

・義仲内々示云、世間事申合松殿、毎事可レ致沙汰云々（『玉葉<sup>24</sup>』）

・被仰下日、停撰政前内大臣、以権大納言藤原朝臣師家可為撰政藤氏長者、藤氏長者本非宣下事、只相讓事也、（中略）今夜頭中将参入時示曰、内覽事各別可仰歟之由申松殿（『山槐記<sup>25</sup>』）

・如風聞者、天下庶勢入道関白殿御沙汰云々（『吉記<sup>26</sup>』）などである。したがってこの時、義仲が一方的に基房の婿になったなどとは考えられない。しかしあえて『大系本』では、義仲の強引さや基房のされるがままの弱さを描き、基房はあくまで被害者とされている。付言すれば、基房は義仲を諫める立場にも立たされているのである。

る。

上述のように、大局的にみて『平家物語』は、基房の繁栄とその没落の運命を、物語としての面白さからとらえていたようである。基房に対する尊敬の言葉は、あくまで基房個人というより「撰籙」という地位の人に対するものでしかなく、憐みの言葉も慣用的でさえあった。

## ② 『愚管抄』の場合

『愚管抄』では基房はどのように描かれているであろうか。清盛は権力掌握のため関白基実の嫡子基通（母は平盛子。清盛女）の後見役となり、撰関家の伝領を盛子に譲り受けさせる。この基通の成長を待つ間の一時的撰政として目をつけられたのが、ほかならぬ基房であった<sup>27</sup>。

『愚管抄』にこの件は「松殿オハスレバ左右ナキ事ニテ撰政ニハナサレテ」とあり、「あれこれ考えず、たやすくとにかくも撰政にされてしまった。」とでも訳すのだろうか。ありのままに描いている。政治の上で力量もなく、単に利用されるだけの人であったようである。

次に、撰政になって有頂点になる基房を「アハレタゞ器量ト云モノ一コソ大切ナレ」と評して、彼の無能さをたたき、また①で記しておいたように基房は義仲と共に政権を握ろうとする。それに対して、



サシモ平家ニウシナハレ給テシカバ、コノ時ダニモナド云心ニコソ（中略）松殿ナンド程ノ人モ、カクテ木曾ガ世ニテ、世ヲナガクシランズトラボシケルニヤト返返クチオシキ事也。九条殿ハウルセク、ソノ時トリイダサレズシテ松殿ニナリケルヲバ、事ガラモ十二歳ノヲモテ方コソアサマシケレド、松殿ノ返リナリタルニテコソアレ、イミジ／＼トテ、我レノガレタルヲバ仏神ノタスケトヨロコバレケリとある。基房が義仲の権力をかさに政務をとろうとした愚かさを指摘し、兼実の言葉を借りて義仲の権力のはかなさをも語る。基房はけっして無力一方であった訳でなく、それなりに野心家であったことも匂わせている。

以上の他に『愚管抄』では、摂籙の權威の落ちたことや、末世である事の説明に基房が登場させられる。末世で人材もなく、「只一人ノ子孫ニハ人ト寛ユル器量ハ一人モナシ」と、松殿の無能とその子等の若死を述べている。それが慈円の「道理」観であり「末世」観であるとはいえ、厳しい批判をこめて基房像を描き出している。

#### ⑤ 摂関政治再建と基房に対する慈円の意識

先述のように、「殿下乗合」に関しては、『玉葉』で明らかのように『愚管抄』が史実に即していた。『平家物語』が清盛を悪行の人という設定のために、すべて清盛

の所為であると虚構した必然性も十分推定可能であろう。『平家物語』が語るのは、石母田正氏が言われたように、この事件によって天皇・摂関家の權威の下落した事であった。作者は摂関政治を理想とし、『愚管抄』の作者と同様その回復を望んだ。復古的・保守的思想の持ち主であったと思われる<sup>28</sup>。『平家物語』の「殿下乗合」や基房配流に対する多くの詠嘆の記述からも、そう考えられる。しかし一方でこの虚構により清盛の人間像を造り上げ、平家の悪行がやがては滅亡にいたる事を訴える「唱導文学<sup>29</sup>」としての面白さへの意図の方が強いようにも感じられる。これとくらべ、『愚管抄』の場合、石母田氏の言われるように、慈円もまた摂関政治の回復を望んだに違いない。しかしそれはあくまで九条家中心のものである。

『愚管抄』の基房批判には、この九条家という立場が作用している。周知のように、摂関家内部の勢力争いはげしく、とくにこの時代は、交代の激しい源・平武士勢力のいづれにつくか選択を誤らない目が、己れの地位保持に不可欠であった<sup>30</sup>。この大切な時期にあったからこそ、慈円の目は他の二家（松殿・近衛殿）の動きには敏感にならざるを得なかったと思われる。軽率に義仲と結んだ基房の軽々しさを、『平家物語』も『愚管抄』も嘲

笑う。思うに『愚管抄』の笑いの方が、切実な思いであったのではないだろうか。『玉葉』に次の記事がある。

伝聞、入道関白院御氣色殊不快云々（中略）又仰云、去年七月当時摂政有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>改之儀上時、入道掌<sub>二</sub>十二重相<sub>一</sub>、朕不<sub>レ</sub>許、存<sub>二</sub>右府当仁之由<sub>一</sub>、而禪門申云、摂政若入<sub>二</sub>右府之家<sub>一</sub>者、永可<sub>レ</sub>留<sub>二</sub>彼家<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>雪<sub>二</sub>我恥<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>本人<sub>一</sub>、且依<sub>二</sub>此申状<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>動搖<sub>一</sub>（略）次第甚所<sub>二</sub>鬱思食<sub>一</sub>也云々<sup>31</sup>

これに対して多賀氏の御意見がある。「彼が基房のこの行動・この焦燥に深い注意を払ひ、そこに反省と教訓とをくみ取ったことは疑ひない。眼前に来るものを手当り次第にとりあげてこれにたようろうとすることの恐しさや醜さを、兼実がしみじみと思つた<sup>32</sup>」。まさに⑪に引用しておいた「九条殿ハウルセクソノ時トリ出サレシテ」云々と同意見であつたようだ。

基房について『平家物語』と『愚管抄』とでは、重複するところと相反するところがそれぞれあつた。前者は、基房を用いて末世における摂録の權威の低下を示したこと、その回復を望んでいることである。後者は、両書の視点の違いである。『平家物語』は世間一般の目で基房を見ているのではなからうか。その運命に同情し、また侮蔑している。一方『愚管抄』は、九条家の浮沈を

意識しながら、基房の行動を我身にかかわり、ふりかか  
る問題としてとらえている。著者慈円にとって、摂関家  
のなかで松殿ではなく、九条家の利害が問題であつた  
というわけである。

### (3) 邦綱と義仲

邦綱・義仲については、紙幅の都合から要点だけを述  
べておきたい。

邦綱が『平家物語』に登場するのは、諸本大差なく清  
盛との「哀ナリケル契」（『延慶本』）に始まり、これに  
幾つかの説話が續く。つねに彼の人徳による出世と繁栄  
を描き、その非の無い人望がしきりに称賛される。一方  
『愚管抄』は対照的であつた。同じく邦綱のそのの無さ  
を描くが、それは決して人徳のみによるものでない、巧  
妙な政治的かけ引きによる立身出世と如才ない生き方を  
追っている。これはたぶん、同じ藤原氏として、邦綱の  
宮廷政界での動きは、慈円にとって注目せずにはいられな  
かつたからだろう。これが清盛中心の『平家物語』と、  
宮廷政界の動静に視点を置く『愚管抄』との間に相違を  
生じさせた原因であらう。

義仲は『平家物語』ではよく、矛盾を伴うような説話  
の中の多面的な人間像が指摘されている。しかし『愚管

抄』はまったく逆に史実に沿って淡々と、尊敬や侮蔑をともなわずに描かれている。『平家物語』の各説話における義仲は、その説話が各地で長期にわたり形成されたものであつて<sup>33</sup>、その「唱導文学」としての性格とかかわっている。『愚管抄』が史実に即していたのは、慈円が義仲自身の行動をみていたのではなく、彼の行動により巻き起こされた時代の流れや、政治の動向に着目していたからであろう。基房のところでも触れたが、『愚管抄』の記すのは、著者の新しい武家勢力のゆくえを見つめる冷静な目に映った義仲像であつた。

### 三 描き出された人物の差異のもつ意味

これまでに述べた人物像について、『平家物語』と『愚管抄』との間に生じた差異は、何を意味するものかまとめて考えてみたい。

慈円は時の流れを述べるにあたり、九条家や摂関政治をつねに念頭に置いていた。『愚管抄』の著作動機・目的は、その内容に大きく反映されたのである。つまり、『愚管抄』の成立が承久の変以前とほぼ説が定まっているが<sup>34</sup>、その著作目的は慈円の理想とした公武合体の政治を保持するために、反武家派の中心人物後鳥羽上皇に

武家追討をやめさせる事であつたと考えられている。そして慈円の政治理想は、国家が皇統一系・公武兼行・九条家執政の体制にあつた<sup>35</sup>。

一方『平家物語』を考えた場合、『愚管抄』とは形成も目的も、享受者も異なる。『愚管抄』は慈円一人の目によるものであるが、各地で長い期間に多くの人の手によって形成されていった『平家物語』を享受するのは、やはり各階層の多数の人間であつた。また未来記としての『愚管抄』の性格を考えるならば、やはり源平の興亡という確かな過去の時代をみつめた『平家物語』がこれと大きく異なるのは当然であろう。望みを託そうとする『愚管抄』と過去をふり返る『平家物語』とは、時代・歴史に対する姿勢が違ふのである。

僧門にありながら平家と通じ、政界にのめり過ぎた明雲は、慈円にとって平家と共に滅びる以外になつた人間であつた。無能な松殿になど任せておいては、摂関の再建などありえない。邦綱の如才無さは、裏を返せば野心家ではない。公武合体という理想的社会を実現しこれを治めるにしては、義仲はその器ではなかつた。これらは慈円の九条家執政という理想に支えられた政治思想が描かせた人物像の特徴である。『平家物語』とは、明らかに視角を違えており、そのような視角の中で生きて

いるのがこれらの人物であつた。

## むすび

『平家物語』も『愚管抄』も、人物だけを見てそのすべてを語る事は不可能であり、誤りでもあらう。しかし慈円の政治思想は人物描写の記述一つにも現われており、それ程慈円の『愚管抄』にこめた思念は強かったに違いない。

筑土鈴寛氏が、「現在の微細な人間的欲念を取挙げそれによって変貌する社会と時代とを見たことは、これも一つの文学的態度といふべきであらう。すべての過去の因を、現在の果に総括して現在の立場に決意を促し未来のため用意あるべきを老大僧正は切々として進言的に述べてゐる<sup>36</sup>」と言われたように、確かに慈円は『愚管抄』に彼の時代を見事に映していたと思うのである。この書に文学性を問う事は非常に難しいと思うが、しかしこの彼なりにとらえ、描いた時代像・人物像がいわば、『愚管抄』の文学性と呼び得るものではないだろうか。慈円の独自の——たとえ撰錄家に偏していたにしても——その歴史のとらえ方は、滅び去った平家の栄華を哀れと語ってばかりはいられず、未来への望みをかけた前向きな姿

を見せていた。確かに政治色の強い書物であるかもしれない。しかし私はそれでも、古代から中世への時の流れを映し得た『愚管抄』の中に、この時代固有の文学性を認めたのである。

## 〔注〕

- 1 多賀宗準氏「慈鎮和尚伝」『慈円全集』七文書院、一九四五年
- 2 龍谷大学図書館本を底本とする『日本古典文学大系』(岩波書店、一九七九年)を用いた。
- 3 国学院大学図書館本(『屋代本平家物語』桜楓社、一九七二年)
- 4 彰考館本(『南都本・南都異本平家物語』古典研究会、一九七一年)
- 5 慶応義塾図書館斯道文庫本(『四部合戦状本平家物語』大安、一九六六年)
- 6 大東記念文庫本(『延慶本平家物語』古典研究会、一九六四年)
- 7 内閣文庫本(『長門本平家物語』古典研究会、一九七一年)
- 8 名古屋市蓬左文庫本(『源平盛衰記』古典研究会、一九七三年)
- 9 『玉葉』(国書刊行会、一九〇六年)
- 10 坂口玄章氏「和歌」(『平家物語の説話的考察』昭森社、一九四三年)一〇四頁
- 11 『玉葉』治承元年五月二十三日
- 12 『玉葉』治承元年五月十一日

- 13 『玉葉』 寿永二年五月十六日
- 14 『玉葉』 寿永二年十一月二十五日
- 15 富倉徳次郎氏「座主被流」(『平家物語全注釈』上、角川書店、一九六七年) 二二九～二四〇頁
- 16 同氏、「平家物語と比叡山」(前掲書、上) 二五〇頁
- 17 『玉葉』 治承元年五月二十三日
- 18 『史料綜覧』第三卷(東京大学出版会、一九六五年)『華頂要略』は藤原為善編の京都・青蓮院に関する寺史書である。
- 19 多賀宗準氏「門跡の対立」(『慈円の研究』吉川弘文館、一九八〇年) 二五五～二六五頁
- 20 富倉徳次郎氏(前掲書、上) 一二七頁
- 21 『玉葉』 嘉応二年七月三日の記事に、資盛に恥辱を与えたあと「摂政帰家之後以三右少弁兼美二為レ使、相二見舎人居銅等一、遣三重盛卿之許、任レ法可レ被三勘当二云々」などがある。
- 22 富倉徳次郎氏「史実と虚構」(前掲書、上) 一五七頁
- 23 同氏、「史実と虚構」(前掲書、上) 一五六頁
- 24 『玉葉』 寿永二年十一月二十一日
- 25 『山槐記』(正二位内大臣忠親の日記、源平抗争についての史料的価値が高い)この部分は寿永二年十一月二十一日の記事を抜粋。(『史料大成』の「山槐記」巻三所収、内外書籍、一九三五年)
- 26 『吉記』(藤原経房の日記) 寿永二年十一月二十一日の記事抜粋。(同右の『史料大成』所収)
- 27 筑土鈴寛氏「年代記」(『慈円・国家と歴史及び文学』三省堂、一九四二年) 一六頁
- 28 石母田正氏『平家物語』(岩波新書、岩波書店、一九七九年) 六六～六八頁

- 29 富倉徳次郎氏「清盛と重盛の人間像」(前掲書、上) 一五七頁
- 30 多賀宗準氏「撰録家の成立」(『九条家』(前掲書、上) 六～一八頁)
- 31 『玉葉』 寿永三年一月十一日
- 32 多賀宗準氏「九条家と源義仲」(前掲書) 一二七頁
- 33 水原、一氏「義仲説話の形成」(『平家物語の形成』中道館、一九六一年) 四三～六〇頁
- 34 村岡典嗣氏「愚管抄考」(『日本思想史研究』岩波書店、一九四〇年)や赤松俊秀氏「愚管抄について」(『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九五八年)などによって、『愚管抄』は承久の変以前の成立と考えられている。
- 35 これも通説となっていることで、古くは津田左右吉氏「愚管抄の著作年代についての疑」(『日本文芸の研究』、津田左右吉全集)一〇巻、岩波書店、一九六四年)や、村岡典嗣氏「愚管抄考」で述べられ、赤松俊秀・多賀宗準氏も同様に説いておられる。
- 36 筑土鈴寛氏「歴史と文学との救済」(前掲書) 二五二頁

# 付記

本稿では比較研究という形でありながら、紙幅の制限のために十分な引用による比較をおこなえなかった。特に邦綱・義仲については割愛した。